

近世
怪談

霜夜星

卷之三

13
1299
3



1299
3

近世怪談霜夜星三卷

東都種彦著



第三回 地の中へ入る狂女乃瀧死

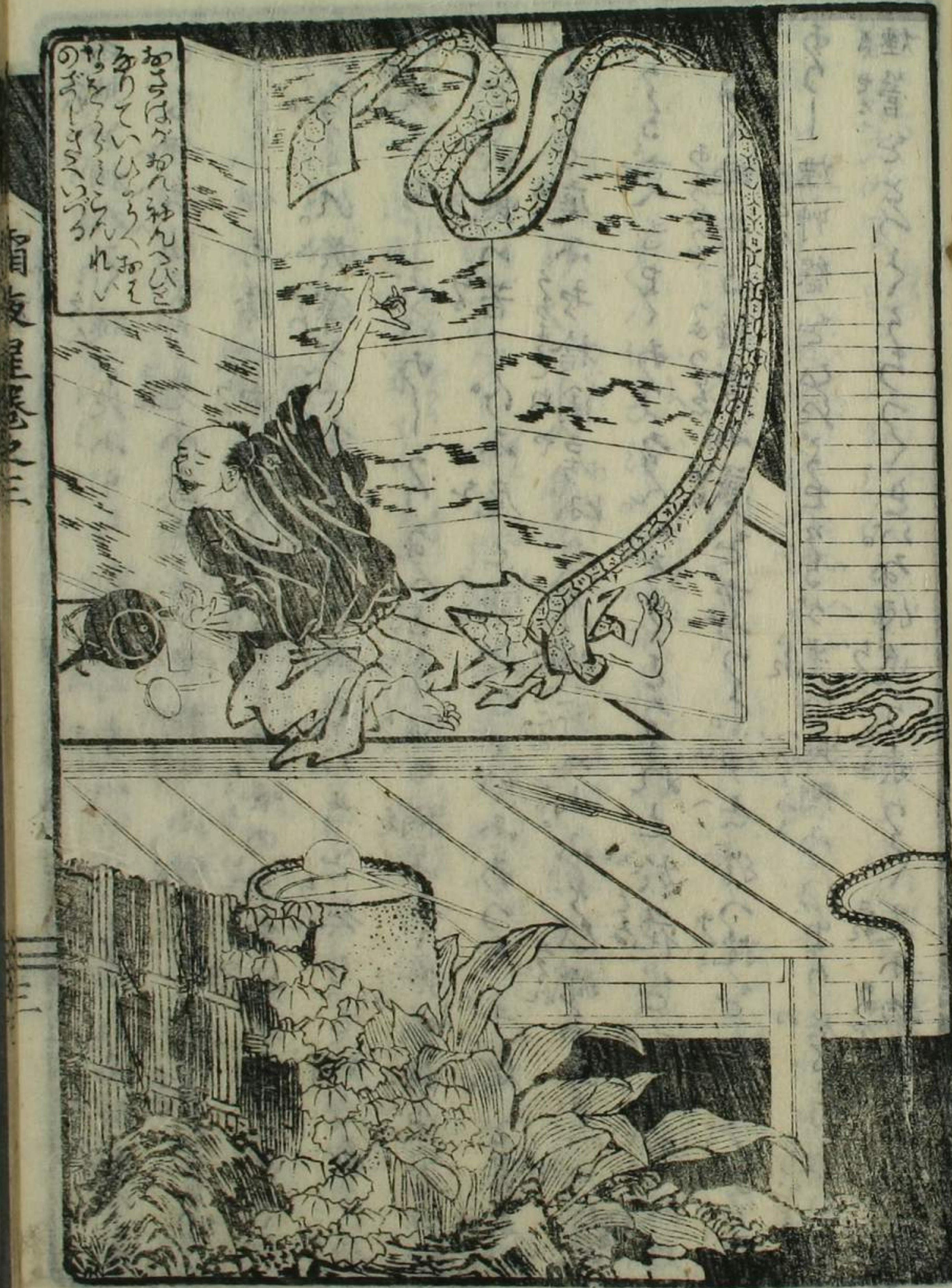
ちり小憂のうれハ日ひをあくると年としのむしと漸おく於花はなを娶るを良辰らちん
 小こむつりりも其日そのひハ伊い去い清せいもつとらく髪梳湯かみかみゆをひた支度さかり
 りる程ほどなく黄昏こうこん小こ至いたり花子はなこハ氷人こおりびと飲次のんじ小こ誘いれ誘りれハ席せき
 とまらつく酒肴しゆくわうをのりむなりの吉酒きちしゆ斟しんらむを小於お花はな今いま何なにら
 銀燭ぎんしやくの火ひうげむぶゆゆ面おもてをそむけ居いるる漸お時ときうつれバ飲次のんじ別
 を告つがらり来きり一状保じやうほが徒者とどとも旅宿りやくしゆくおとく飲のんらんとなる小二
 人ひとひこつる押止おしどめとり小今こいま一盃いちばいをそめれど飲次のんじうらららひ常言じやうげん小

霜夜星三卷之三

も甲夜の程とつひ侍る小思つ夜時をうりせり。新人あはれゆく霜雪
 と積る物語るゝ人と立取りぬ於花の芝浦の館ふかり侍女婢
 奴もあらざれば。ふりう枕迎の燈火を遠ざけ屏風ひたす。夢
 あやさんと夜半の衣をくちも今日へ思ふまじ言葉とあり
 たり。枕上の裁と小つひ君妻を娶りふこれ一時のこらむれ小
 こ。元来馴睦とあり。次子さへ退けぬ薄情なれば妻も色うれ
 小袖を身小まとい粧ひをそりまらうら。斯枕をあらぶるふとも秋の
 野末の賤ふまがれも。薄くまらうら。又異人と迎へるふらめと
 へ。伊去清うちまらうら。まのまひそ。のまら於沢を退く薄情
 あれば。我も我と私情を通じ。伏保への薄情あり。於花面小
 耻をいざ。斯のまら。理不似く。妻い。四五小亮む。

既小伏保へ。園小杖つく。年まれば。ま。似気あれた。女夫あ。君と江
 糸をひらる。あれば。必む。お。かけのふ。と。其身も。小。あ。う
 り。が。笑。小。一。奇。と。ま。死。へ。四。更。の。頃。暮。光。飛。来。く。燈。火。小。ま。ら
 と。あ。ら。り。あ。ら。り。と。三。度。夏。の。夜。も。あ。ら。う。小。怪。変。小。あ。ら。ひ
 短。髪。を。枕。り。と。小。近。つ。け。れ。漸。そ。の。ま。も。止。り。伊。去。清。不。斗。公
 づ。煙。州。盤。の。抽。斗。り。光明。寺。あ。ら。里。人。の。あ。ら。一。簪。を。出
 一。の。身。此。簪。を。お。お。え。ら。う。め。是。情。人。と。つ。ま。れ。や。う。種。な。り
 一。が。つ。う。の。又。昔。を。語。る。賜。と。なり。と。雨。終。ま。り。あ。ら。小。臨。く
 仰。塵。り。り。と。物。音。と。枕。方。へ。落。る。の。あり。短。髪。の。火。け。幽
 あり。小。の。大。さ。二。二。尺。も。あ。ら。ん。地。へ。於。花。の。女。の。ひ。ら。ら。ら。り
 あ。と。つ。く。飛。退。く。と。伊。去。清。あ。ら。ま。づ。め。右。小。手。燭。を。そ。り。左

東不... 三



目録

目録

小蛇と摺んぐ縁さたふらちまぐ。閨房ふいんとるは不被地へま
くも伊去誘ふり先ふらりく。坐敷中小頭をりげ舌をまいた
居たり。伊去誘心中ふらふへ昔より女の一念地ふらじさめ
少らるる。於澤が一念及鬼と成る。いとを怨るも知るなまら
公弱くありく。あつらりまんと。午燭の柄ふく蛇の胸中とつれ
とをせ。蛇の若りげ小尾と頭をひとらふあつら。午燭をまら
その中庭ふお捨園房ふらり。此所は山ふらひ浦ふらひ地はれ
は。くも夏もくありあつら。おそくともれと於花を言好お飲ね
程あり。曉生ける鐘声ふ夢をかあつら。伊去誘へ枕をぬらげ。枕ふ小
あり。煙州盤をひらるる。先の地側ふらり居たり。おそく
煙管をとらちつくと。はる河近う来りく。先小物諸せ。於花

簾著を唾へのら出さ。いひひびと。とらんとまる小忽ち一箇の陰人とな成
尾風を越し。飛出れば伊去誘も水涵とみせし。物音なこひ
於花の目や。おそくおそくや。人と食を挑く。又夢をむらび
幾年を経く二人の愛子をみけ。兒を悦五郎とらびく。五丈
る。この頃飲びあり。妹を於村と名号。又彼伊藤快保八年去り
と。おそく近き莊家より養子をあら。此者を伊藤金吾と改め
今芝津小住り。いとと金吾と水魚のふら。又飲次もま
のどくあり。ふら。我誰ふ来れ。彼兩人の説話あり。半点も
空言ふあり。おぼらげ。不傳夢の彼飲次が舍ふ。此頃まら。あや
と。あり。是り。く。沢子。が宗。なる。と。おそく。あつら。と。あつら。

それどその一頁のつらつらとく我小ぶ小語らば。さきれば印籠を唾
 へさりー小蛇も由縁るれおあらば。侍女秋次へ被秋次が女あれば
 物ざりのうち少時席を遠ざけーとふを拍く秋次を
 へ。酌をさうせ又杯をさめれば人くも音をあやうく恐れ
 へとあやうた説話とつひのあうひる。時小不思議や先の小蛇
 縁されうりさうくとこのうりあがり。秋次の裳のあうひへうりつる秋
 次呵と叫ぶぐそのちく倒れ息ささるれば求次郎をさめ席あ
 らぐ。さういふあうりけると抱さかたは小。やありて息出さうく回
 小糸を酒ぶ。髪もぐと眼さうづり。恰も繪ふうつ鬼女のむく側
 の銚子をさうくと大地小投げ。あう養憤やうとこのあうひ。伊
 去清が女計せつめさうらば只畜ふおぼうとのこさへ。さうる秋顔

もあうざれば川あうりそ。先せうぐおひさや快深が側女と私
 情を。彼を髪と奉意とる。要さも憎一の一念忽地小蛇と
 ろり。伊去清が身小進づけと被が勇氣小さうとけられつる
 念へ逐ざれど。さうくと人の怨いあうりのやうなりのや已ら夫婦
 三途の巷小誘引んと奉を握り牙をさう。ゆとつく息の夕陽小
 ひうつく火焔のむく。求次郎を恨めしげ小おんやり。やう求次郎
 汝が不良口のち小多くの人の笑語をさうり出さうひの西の十重
 世重のさうらう。夏のうらりやと板縁をさうらう。西へ走り東
 へさうらう狂さう。切山嶽の罪人のさう。さうと庭前を眺
 らう小此様前小その重ささうりがさう石盤あり。水端ことさうへ
 くれへ己が顔の水面さうらうを熱と見ありと汝わどるる顔づも

霜夜星巻之三

三四



新編 浮城物語



うしろのやうに
あつちのやうに
あつちのやうに
あつちのやうに
あつちのやうに

新編 浮城物語 三

るんといふもひもかりど。足下より歩く。伊去橋が館小地。光の怪変と語り出又如くこの怪変をりゆく。彼教次乱言と口を
 いうら伊去橋花子のさうなり水人あゝる教次もてうく恨する
 りやうなれ此のら伊去の家も。つうやう怪変あらんもさう知
 ぞうび。さうく尊容をも詳小縁故を告んら。まのたうといひ
 ね。金吾も天おとと。中つ教次が光景をえんと。おさく求
 次郎らとも。相戸の風入より眠さるね。教次のなほねい止び
 ひさう哭悲と疊といれわぐ。業を束く人形をつくり。お
 置りといひ。汝花も此服をりて伊去橋が春を發し。あび
 此口をりて沢子を退けんと。表計をさあらんとい。人形
 の面とおい。さうとを替みくつらね。又右のふをく衣城

ひれりけたのふと。枕小らうらあつんと。潜然と涙をかき
 つかふと。於花汝つら小此胸小おぼえあらん。と二度等小
 とつた通せ。不思議や皮さけ肉中ぶるぐ。鮮血淋く。と
 去り。かつと。求次郎金吾の二目もえび。後堂小逃り
 とた。面土のぞく。漸むり。あがり。あも更れ。ば。臥す。りて休
 たり。かくて。佐助へ。味且おら。起出。教次が。押籠ら。と。一屋あやり
 小音も。さう。と。い。づら。中。を。り。相。戸。を。ひ。り。え。る。小。業。人。形。一
 あ。の。さ。う。つ。く。教。次。へ。ん。え。び。出。口。を。か。く。と。戸。を。お。け。て。走。り
 歩。へ。道。理。を。と。克。く。足。を。さ。し。バ。巻。を。も。出。し。が。た。格。子。小。髪。乃。毛
 十。筋。ひ。れ。り。あり。さ。う。り。や。出。ら。ん。と。い。く。あ。や。も。求。次
 金吾をもさび起し。宅地のら中へ。ゆるとさうさう。さう。さ。う。も

それとちりりんのものもな。只秋次が髪飾海辺ふちありしむむに
紅へちりりるるふ。まきしとく小袖の裳浪間ふひりやくとを急
きひれあげられればあわれむ存くさのふの顔色あざりもな。蓮の
あはれきく瓢のぞく腫渡のうらみ瀾死せしありさやうせし
きなうの趣と昔死骸と秋次が方へちりりや。尚花方の家も
崇りあへん夏をかそと僧と清く経とらやし一付と書
筒ふまゝな。作助を使うく鎌倉へ走せられ日あはれ伊
か室ふりり。於花小も對面し求次郎がうらみ夏と物語し
う。於紙が靈の秋次ととり殺せしを金吾もやのあはれ
うらみどちりもな。語り出彼死霊を避る夏簡要とへしとねも
ひらふ夢えれば伊ち湯夫婦大ふちと眉小火のつね足り

花のちやうと 夢乃奇克

蚊の登るづらぐ。急ぎまぐのうとの宮居り。神主とちりり
みどりり。善と施し身と慎むると。まれうらも両家うら無
克ふしとまろのなれとる。
陽馬羽とやとめび。まやも三年の星霜とうらうのち不良克出
来て透ふ花方伊藤の両家絶を其縁故とへ求次郎往年より
偶友がさ小誘引れ花と柳の巷小眠り。隅田の月えくくさ
夢が京の笠やうふとめり。女肆がうひ止とねる。此頃名づれ
巴橋津島とやん小殊小相愛の情とうら。且夕更小家ふあざれ
い求次郎が伯母近さむとりふありらう。此夏略夢及び鬼ふく

求次郎が書連人あはまきくさるるべと既ふよの定りし求次郎い
 ちさういふらん二りまあるる。又徒いらんあは津島と枕上小誓ひし
 このさうらんをさるひつり。ひとまが此ま白地小津島ふりひらん
 人もかうも討くと花巻小通つる頃金吾も折ふとこのを
 つね一日金吾求次郎が舎を訪ひしを。これわうとととと
 つ。その小宮川小掉さへ一葉と浮わしらう。三の槽二
 槽逸もやと吐と向く走り。両岸足ありと南へあゆむ。右ふ
 うと一の森松柏枝とまらんたへ並木松のむらうらあ。三谷通
 いへ稻荷の岡の馬も棄又ま湯どののんかれ細せんうとつと
 うとい爰小三尾かりこ小五尾酒をど飲く肴板の板のあをまあひつた
 葉のはのんせへ一膳六支うけねるうとまうせ。行燈と歩い鬼角の

乃ふらや柳巷ふつとと太夫格子散茶梅茶次女郎房乃やと品
 ぶらの女肆へ五町ふとととせく建るへ板顔柳腰の花娘哉と
 いと折いさるるの一二の早川三河江口定家家陸吉田さる。河内
 坂田せいの政常万世小宰相大ら。小う。半太夫吉十郎をどられ
 時の花魁あり。花車つれをひく。憲くら道中揚屋ゆれの味あう
 へ筆に及ぶうもる。金笠市女笠奇特頭巾褶公伯さるつゆあり
 まこの。そらうつあへあなりゆん瑤瑠の柳象牙の簪あ。金粉りて
 唐花を画せ。千餘漆三好漆加賀結の色漆鯨たういとと大破うの
 びとび髪さうして眉小友禪漆の丸ブ。常袖小まをさるつら
 ひとあり。又山路。須崎の漆りやうら物。鹿子小吉長の小色漆
 とか。帯のそ。天懸緞のこやうひまび。五どんこげ小結ひるへたを



くわんごん
あきつ



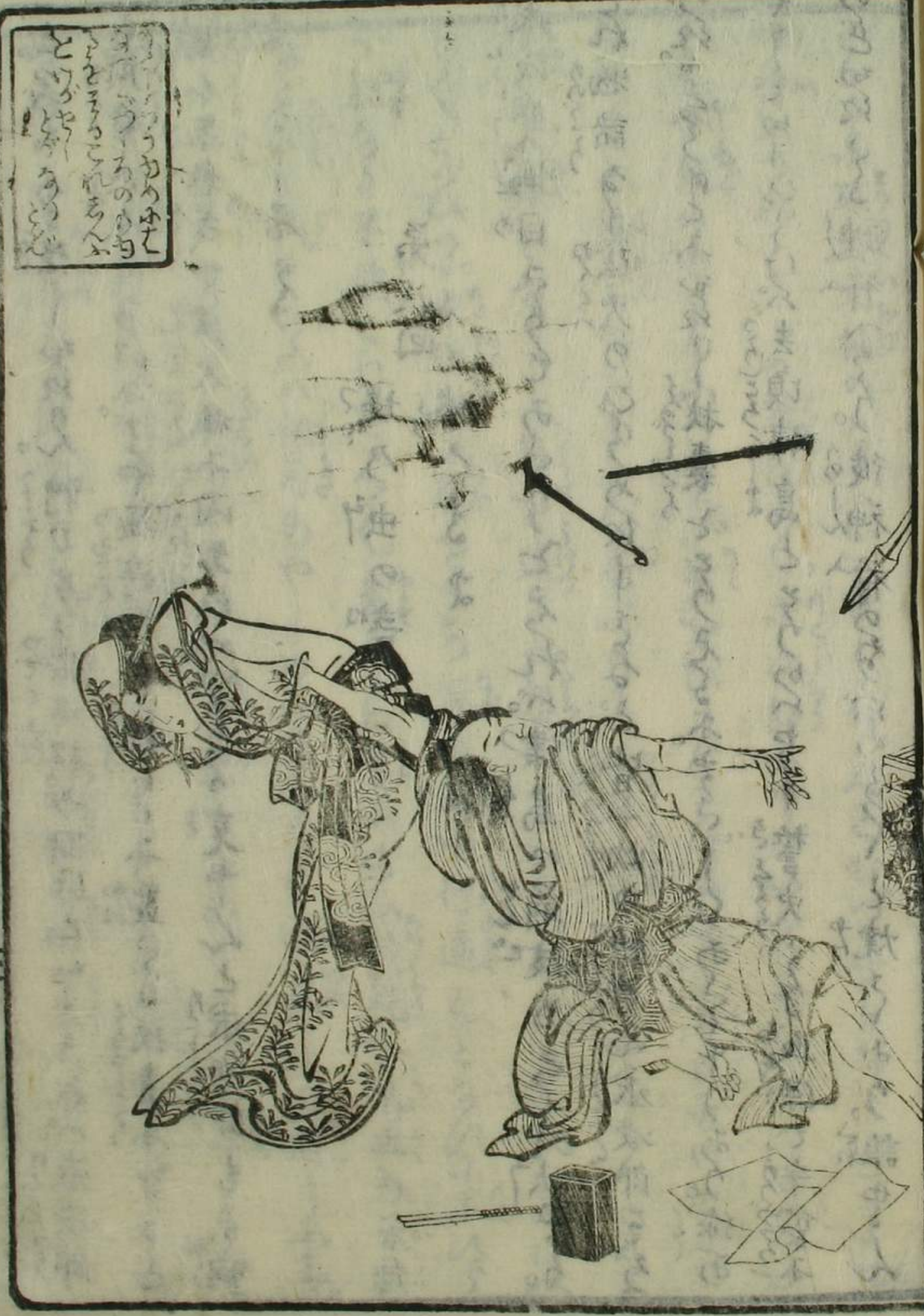
あきつ

あつて風流なるなり。此頃よりなづく芙蓉といふ妓のそとをまねび
 一極小輪子鼻諸の馬下駄に今極ふしくいと目ざらふみこみらら
 ことめつあとい人形をか抱くあり。群集るかしてどいへらまこと
 かのがまてふあゆむ品あるうふ臈富士の野郎並に肩をりくし
 衣に附添ふ黄繡子のうらつりつりとも羽織もつでの大小と行足つふはじ
 ころん甚七が刺毛り鞆あふべく。終竹紫竹の杖つれこみりや尾呂丹
 前まごの餘風へつり髪つ男へ鬼のめんのとつりく頭より羽織と
 ぶり。角太夫がりの七小町。初音三井寺など。されし由ねの扇うらり
 してうらひ。高崎足袋細緒のうらぞり。朽木結の丈らうらをま
 ろ浪花人とんえ中川喜雲が口あひとつひ唐子やひ扇ありとに
 わとまねばかぞりくもむべん。その餘に今極帯のゆ浪津蛸蛤むとびの

茶せんがむ。むらさきのむらさき頭巾焼印あり。さる債編笠ぞちと空手振
 五水鈴虫のうら。説宣の道徳あつひのうらの津福理らうらうのんや
 れづ。小諸郎口くふこちれ。安中羊の蜘蛛のおらふの天のやう白ちり
 りんの綿入をあり。雲間ぐと。緋くくのごとあらあり。南のやうり
 北ふさ。賤ひさらふひつりくご。程うく求次郎金吾の巴や
 う揚ふのわれは珍魚一尾百銭とつらげ海山のさるなとらうの雑
 枝禿うごあつりありく。つ。やがと相方津島も出らうが。青
 羊端麗ふくく花親柳腰もななつり。求次郎がやうらうもむん
 ありと。金吾もむのうらふひり。まの夜ハ雨をがうりひと。海老あやう
 金龍山の別れの鐘もうそふ夢あり。まぐるとも。小一日二月とか
 くらららわくとある。求次郎津島ふむつりく。はらへ。いと。は。身とかく

馴染しも一年あがり偶々ありしうその伎身ふりて煩悩
 の大りてども返らば又西舟もやうらうらと契りまひし。却のされし
 ともつらんさうさし。幸ひつとふささる書もあし。西舟を頼て迎り
 とつりの花と縁んとあへども。伯母なる者うそ割く詩さび三十
 ちつれまじく暮がふ人のさうさ人もあまびと切ふさう。知るるに
 も唐衣つよびうささるふ約とららねたあさうさう。西舟の情合更
 志もつらあうねど筑波山の蔭浅く通つ。人目の圓もつらえり
 じぶ。かりくならで通むさう。又逢まじくの余波とさひあの日頃
 象ふらうべ。西舟もむらうらまれど今宵いひとく不お解り人此更
 ろく白地小語んとあへども。つらでの山の岩つどつらで胸をさう
 つらと枝葉つらつ小物語れば津島へさうふつ人もせぬ赤次郎が

膝不醫まうつり居りしが顔くらあけく人の書をさうめつら
 者と兼好とやん法師のいひしうど。さうしてあはれむも中を
 らうらめれでせん。更誰ふとせん。枕の塵憂川さりの身ふり假
 の契あやまちで実ある心志のあのもう先とも泉下へのうら賜あり。
 寄方定めぬ捨小舟今日の客人のむ小徒ひ又明日の客人もむる
 いらさうふりてなり。待夕送曉号誰人の為といふとをさうら外境
 客ふ出れがうをほう不問夫やあんとせり又或客へつと心へのほど
 えんせんとさうら針とめく腕ふ各と刺とけへ空言の実言とめりい。頃
 て廓とさうせんあうら我宿ふさうらんと。鬘らひさうらも疎うら。ま
 とふ人あうさうさうへあうで浮世のさうらひあて。あさうら殿と恨とあ
 あうねど今のさうらうらへ皆跡さうら空言あうら。つら心のむと受えあう



とつづらふ。憑一がれん。判刀そり出。小指うつほと。ちいされ。求次郎
も周章止んと。多岐。や血進り。枕め。小置。杖囊。かると
等く。吾思。や陰火。猛。凶。出れ。づ。る。夏。や。んと。求次郎も。憫
然。居。

第五回 堤乃虫の音 水ぐるま

求次郎。偶。目。さ。り。と。あ。り。と。を。見。れ。ば。津島。へ。前。後。も。ろ。く。伏。せ。り。
これ。物。語。り。陰。火。の。ひ。ろ。め。れ。と。ま。ど。皆。一。炊。の。神。夢。の。求。次。郎。こ。ろ。
づ。れ。ち。ろ。り。と。小。ち。れ。杖。囊。と。そ。り。え。る。小。さ。さ。く。あ。さ。り。あり。狭。あ。
や。し。の。ひ。ろ。め。去。頃。津。島。と。り。か。り。誓。史。う。り。血。塗。て。守。袋。小。
の。と。ち。れ。し。神。存。へ。り。彼。神。存。の。あ。ぶ。わ。く。と。焼。く。あり。誰。中。ん

ら。ら。と。小。取。出。大。桶。の。ち。ろ。へ。か。も。し。る。ん。と。む。づ。る。と。あ。ら。は。し。し。
神。存。あ。つ。ろ。く。一。ツ。の。話。説。あり。求。次。郎。つ。ま。づ。り。り。あ。ら。は。し。し。
と。女。兒。の。ひ。ろ。め。つ。ろ。り。髪。と。ひ。こ。ご。つ。げ。ふ。る。哥。貝。子。竹。と。ま。り。
ら。と。く。と。餘。念。あ。く。あ。さ。び。居。ろ。り。小。年。四。十。も。も。あ。え。ん。と。あ。
税。の。み。鈴。と。ま。り。巷。と。過。り。忽。地。足。と。そ。め。額。と。あ。つ。り。隣。む。べ。
しく。と。つ。ひ。つ。求。次。郎。が。顔。と。ろ。ら。詠。め。既。不。行。過。ん。と。多。岐。小。求。次。郎。
が。親。ろ。る。半。藏。と。れ。と。ろ。く。易。ろ。る。ぬ。夏。小。ら。ひ。彼。税。と。止。め。求。次。郎。
あ。と。施。し。向。く。し。の。ハ。祠。司。あ。や。の。う。り。あ。り。と。吐。息。し。て。過。る。と。あ。
此。小。兒。小。若。の。つ。ろ。る。笑。あ。て。も。あ。さ。び。慈。悲。と。と。れ。く。あ。れ。を。承。し。と。
町。嚙。小。同。れ。れ。彼。祠。司。求。次。郎。と。や。び。さ。り。て。つ。ろ。る。此。小。兒。是。ろ。く。腫。
の。ち。ろ。小。若。同。の。と。れ。雲。と。ろ。正。く。劍。難。の。相。之。年。三。十。と。あ。ら。へ。

うらぐされと向人なれ小語んへ物乞んも似たりと云ふと。むふあまり
 て遠小言葉と獲せしくと物語れば半藏のつひに外小子もあつ。
 実小獅子の玉と毒がどく。せりけ長ると悦びくわが老の来るを
 ちるべ此故孽いふくとも免るをあらふ示し人との餘を多くこのむふ
 親へ一言ゆも及び一投の凶刃帝をそり出く。朱をりく海松と東
 くまの文章と書さる。くまの此符をりらる。二月三月の向へ幅
 五尺ふさげざる小川あくも舟を博も。又さうりあくも不淨小穢さそ
 めふ罪と蒙ると泥をわく身へ及るうりも速るんといひあつと。遠
 小寺くうり所とあらび此税と見えありし人のいさへ。是ふめと肥前四長
 の産小く青木玉計といさるのいさへ。某の神社とまのり。或これあひ
 かけり久罪小やせり門戸と青竹あく内られり。神小はつさ



人あしあをきく
 もとじらうがおこ
 きとくけん人の
 ありと

身ふあらしと。四方の國々旅行し。駿河なる芙蓉峰ふのむらと

うの根ふのほりく見ればまねたその枕ふひきふ草ごもるし

といふまじいとありし。さるやんむらさ宮人より召れく。神代の巻城

講せしめ。恩賞あへりつくと。望所ふあふびと。兩脛とも

まて。行方まらびるり。此神符をあへり。果しく彼主計とと

そり。求次郎の肌身をさるべ神符を持たりし。今津島が容故ふ

迷ひ誓文の血をりく。神符を穢し。此笑をひた出ひ。是正小扶保が

家を絶さん為るれば。於澤が怨の枝葉あし。譬ふ。時雨ふ蔭と

このそ。紅葉も晴くのちいそのをさ。ゆめがむ。此夏求次郎

些もむづり。津島も目覚て互ふゆ。け物語るり。三

礎といつる。禿ちり来く。誰か人君ふあらしと。出ありと。あらし

ももく。心入来る。そも近し。うら。朋友あり。卯月宮大夫といふ

りの。ま。ガハ。と。頬刈組とつ。く。人の。旗。奥の。席。あ。無。れ。小。相。り

ス。十字路ふ。横行なり。怒れば。則。殺。せ。り。の。か。り。と。不。吉。と。ま。る。一。匹。の

悪。提。の。その。出。し。ち。と。ま。る。ふ。都。富士。の。大。編。笠。と。も。ふ。り。ち。奥。志。や。ふ

内。色。の。う。う。つ。れ。と。ま。る。椿。と。ま。る。近。江。布。の。羽。織。を。着。長。佩。刀。短。中。刀。つ

や。く。さ。う。なり。ゆ。い。く。く。の。か。ね。ご。も。う。ら。な。い。言。葉。と。巧。み。便。僻。諷。ひ。求。次

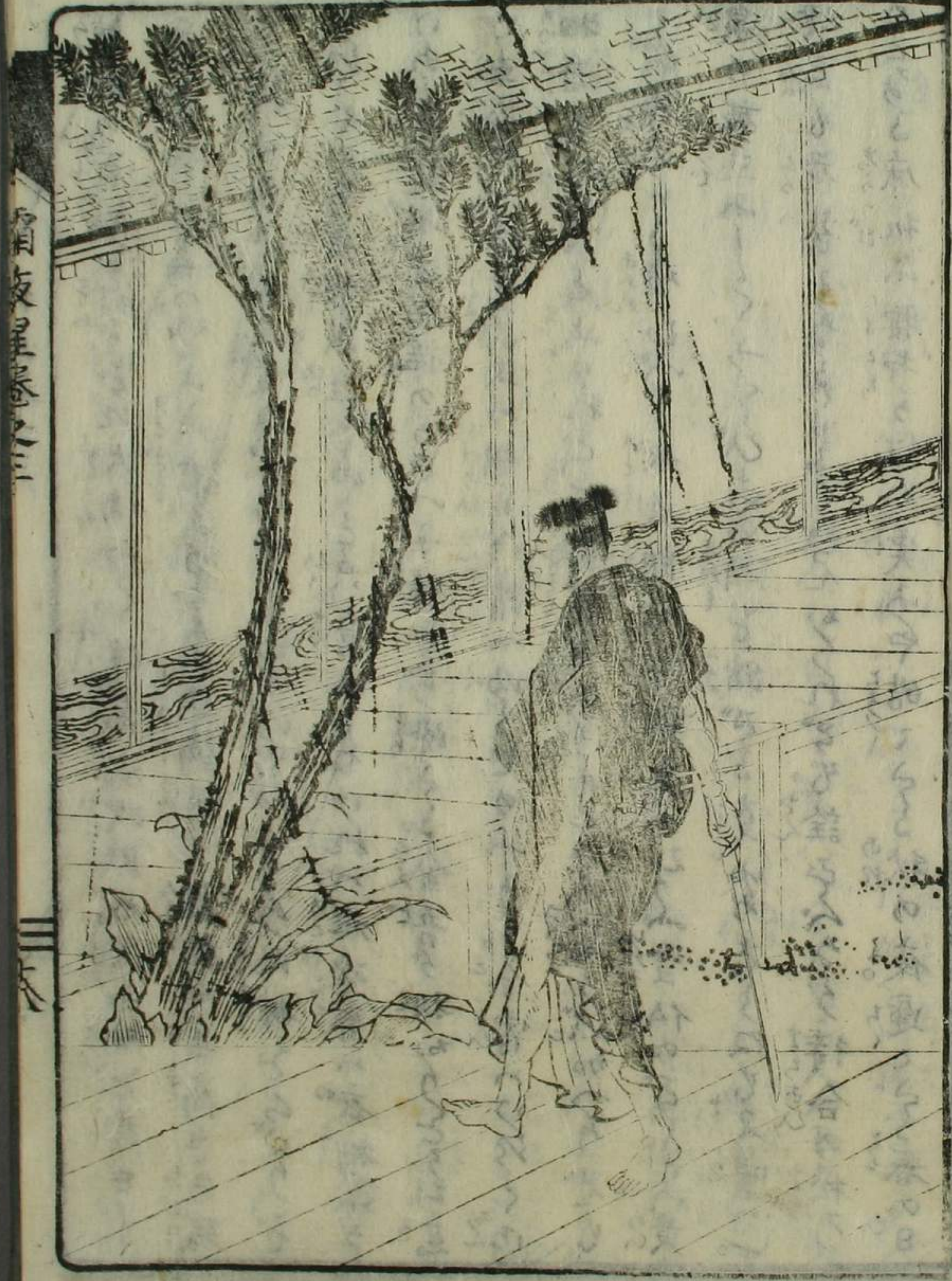
郎。ふ。り。り。今。夕。も。ま。る。れ。かり。う。と。あ。と。と。暮。ひ。く。来。れ。る。求。次。郎。の

う。り。何。う。く。く。久。く。訪。ひ。ま。ら。り。や。と。互。の。挨拶。を。り。金。吾。を。も。略

ひ。さ。と。ま。れ。び。も。日。の。大。酒。あ。く。生。と。隔。し。び。く。な。れ。ば。先。二。人。あ。く。夏

足。ね。と。その。頃。流行。る。河。内。流。の。ま。げ。ぐ。吾。書。る。ま。り。の。ご。と。ぐ

あ。ご。声。あ。う。く。鳴。い。く。も。奥。ふ。り。玉。柁。あ。ら。り。止。び。殊。小。官。太。夫。ら



月夜草子



らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん
らんらん

月夜草子

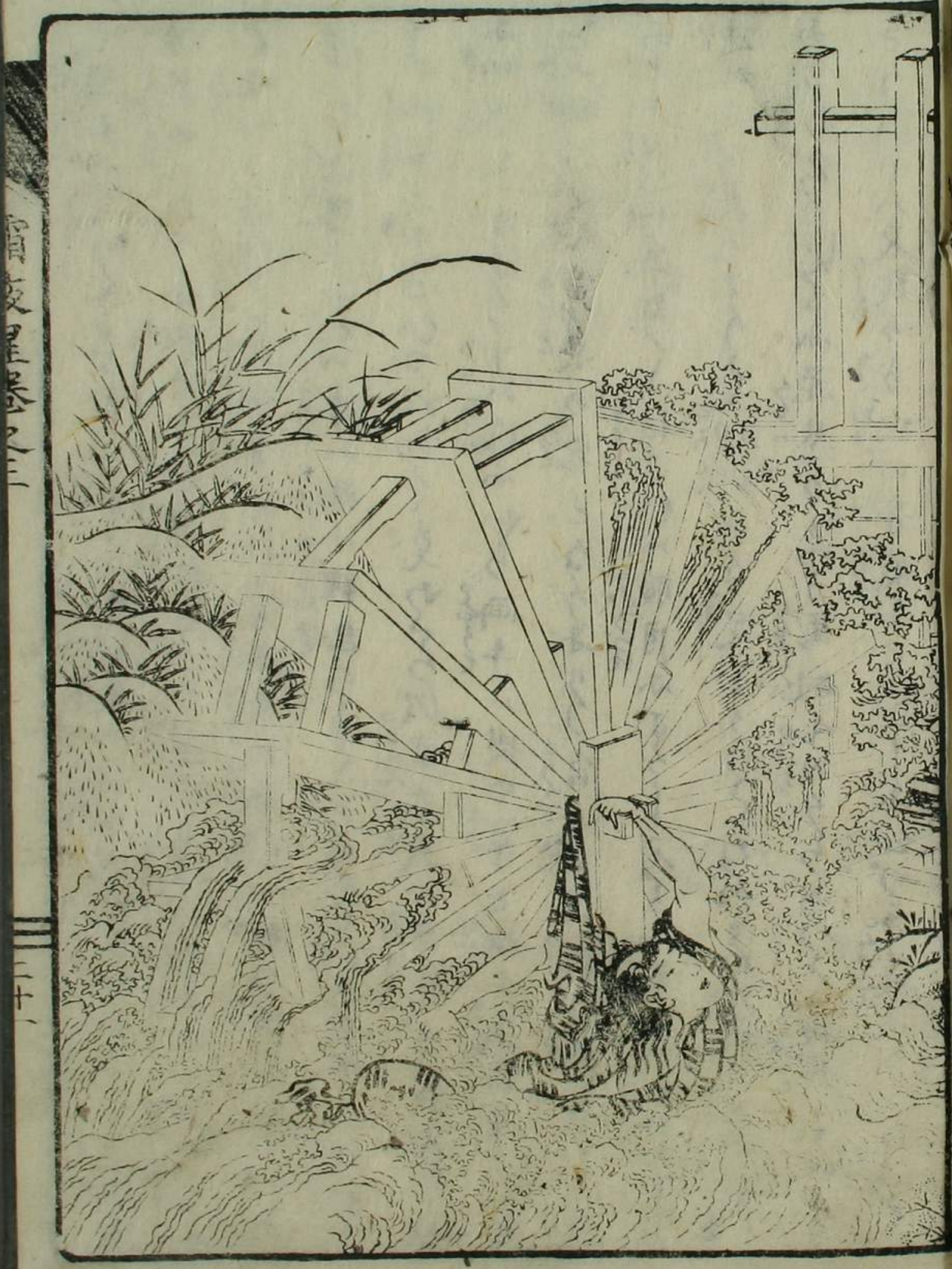
十七

鯉の百川を吸ぎて大浦ゆく津島求次郎も大い酔と獲り
 官大夫のいづれも求君あつて秋漸更で花街小谷高き名残
 の雁塊小近き出さ言うど又ゆりかづや。ひとち此樓をさぐりぞ
 りけくのら虫夢小往やと只管さめりければ求次郎の衣桁小
 けある肥後木綿小裾のうへ子持さう漆る。金吾羽かりとら
 て立出れば津島つゝの明日の館へゆりや。今宵のいづれ
 物語もゆりやと止りれど流霞春風ありと人定むべかりんも
 ちび出ゆりや憐むべし求次郎が命朝馬小む雪仁のぞく。黄
 泉の旅立ちゆく。うさびまの國と踏ざる夏ゆめあはれ又嘆し
 津島も花巷をるるまなくへんぢれども詮さぶあう待合の松乃
 りくるる床机の腰あけね。実あや皓くさる秋の夜逢くさる春の日

小長しとせむ契るるふ。こゝひ一にして。又錦紙と同床小あ人
 とさしうむれ口覆ひま。人も目止る義入。さても二人へあはれ出
 駕づけの松をもあ過し。ある官大夫の貴客何とく斯廓小
 せむねむるまに旋宴とひれぬよと問れば。さればと我花街小
 と厳し警る者あり。されど賊のひまありと守人のひまありとや。ん
 更小家小あはれれば。兎角書迎んあはれなく。なげと遠小其更整ね
 さし花巷のえりや。とさし此日頃娼家小居れり。弾家と忘れさ
 ありあはれと物語る小官大夫を中ふらふ。此求次郎は千口小ああり
 願富家へ書迎さふ。すゝ極く金類の類の物。これ小
 しく斯巴栲小日を送小疑なり。と忽地悪意を。言
 らく。此頃賭小利を失ひ。とく皮袋を覆ふ。さうさうはて

伊木綿のそねりけりのこへのこへ偏み足下の惠とけりせんばんばんひん赤貧の病乃
 根とせん子親粒ふても貸われれと。ひつけがましくつひられいつふ
 爰へ途中の家ふつらのちのちの鬼も甬もせりとときられ官太夫の
 夢とさひいく惠とさつとさへ明路と同一尊客の館ふり
 んと言葉とさね論とつふあど求次郎耳やりくいわこま
 けと虫の音さんぐとりせり。足下の賭の吉山さあへ赤らんと
 さらふりありねば官太夫も口を閉ふさく虫の声をむめしく
 堤を下りるふ楊柳の水立月み影とく鉄地小路み横らるる
 河と中人空吹風も寒落くらばち時官太夫私ふらへ金吾の酒ふ
 酔ひ已橋みくへ残面跡とまん道理う。早竟殺害しくと互退
 ありまるらと懐の重らふ目やらくとん遺さぐとと求次郎み切

つくとは何らめりとくとるるるれ。呵といくのけさふ倒れは汝悪賊の
 る罪ありく我を殺さや斯又ハ牛小向く琴と巻らる小以れ
 どもけ體小懐乃ふまれとうい比典之赤練とみとうり肩太
 うりし淺疵られ内と右身と替へ官太夫小抱さつ官太夫の
 只一言の問答もならぬやまらぬと切あしふ求次郎あらうて堤
 の下るる小川へ落らり流らりと刀逆手ふらると。あいと声け突
 りらが求次郎のうらくも水道の掘ふらつさ這あがれ官太夫が刀の
 空く泥と刺通しらり此時四頃の頃られ道哲庵の鉦の哀れ
 小さゆらのこめく四方寂寥としく一つあらる虫の声けやく村
 雲覆ひく月全くあらぬと比暗夜小鶉鷄を放つと彼方ふとふれ
 此方小伏又おのりる二ノ太刀を腰筋みくうけととと鷄卵を握



岸の草花



つらんどやふね
とろろんとく
いらうとろも
とろ

岸の草花

て盤石小おつくるがどく。城々さる比良の山下風ふ。まほれく。真野の
 浦菽吹く。さる小似たり。求次郎そどめ落さる流へえ来田の向(程)よ
 く水とひんぐさり。水道へうけさる水車の水門へ樋の板をあらうあ
 りを踏落しりれば車ハ漸小鏝出さるくともがらふ。あや求次郎が
 う袖車ふすくひつれ動く夏あさる官太夫。是幸と袈裟がけ
 小切放く。欄あり下ハ海ふあら。両手ハ堤の草を掴み生踏住二十七
 と一期うく。黄泉の客となりふら。官太夫ハ止め刺んと。うら
 あし。刀ひけさもく。抜ざれば臆月ふまう。えさ小萬巻と書せし
 辻礼小の美あまうく切必さう。足をうけくねえね。堤の上ハ人声
 あり。振うらるる小花巷さる馬廻。刀うらうらう。挑打まんと
 さり落さる。又後の方虫の音。俄小とぞん。小むづる。是取ふく。うひさ

ら。果しく小路づし。小来る者あり。さくさくと鋭鏡をうし。とうら
 つる。小的とつれ。とそへる。足さる。小とそく。さる。逃んとさる。小後。さ
 度。さる。あは。ゆ。ま。ん。て。窺ふ。求次郎が袈裟小紐とつけ。首小つけ。あは
 と切らさる。同章とそ。あ。ひ。の。け。の。四。方。小。人。声。さ。く。や。れ。人。殺。さ。う。と
 う。ぐ。り。小。藝。の。畔。と。ま。ぬ。さ。旺。と。つ。ひ。行。方。も。知。ら。ぬ。逃。失。さ。り。

